

L27-1

平成27(2015)年度
市川中学校 第1回入試問題

国語

50分 100点満点

平成27(2015)年 1月20日実施

【注意事項】

1. 試験開始のチャイムが鳴るまで、この中を開いて見ないこと。
2. 試験開始後、解答用紙に受験番号、氏名を記入すること。
3. 試験終了のチャイムが鳴ったら直ぐに筆記用具を置き、解答用紙を裏返しの状態にすること。
4. チャイムが鳴っている間に記入した解答は、無効にすることがある。
5. 問題冊子は各自で持ち帰り、解答用紙は必ず提出すること。
6. 答えはすべて[解答らん]にかき入れ、記号で答えるところはすべて記号で答えること。
7. 解答の際には、句読点や記号は1字と数えること。

受験番号	氏名
------	----

一 次の文章は、土井隆義『つながりを煽られる子どもたち』の一部である。これを読んで、後の問いに答えなさい。なお、出題に際して、本文には省略および表記の一部を変えたところがある。

日本でもNHKの「白熱教室」という番組で広く知られるようになりましたが、①社会心理学者のシーナ・アイエンガーが行なった興味深い実験があります。あるスーパーマーケットの店頭にジャムの試食ブースをつくり、ある週末には二四種類のジャムを並べ、別の週末には六種類のジャムを並べて、買い物客の反応を探ったのです。

その結果によると、二四種類のジャムを並べたときには買い物客の約六〇％が試食したのですが、六種類のジャムを並べたときには約四〇％しか試食しなかったそうです。ところが驚くべきことに、実際にジャムを購入した客の数は逆だったのです。前者のブースでは買い物客の三〇％しか購入しなかったのですが、後者のブースでは三〇％近くの客が購入したのでした。

ここには、いわば「多様化の②」を見てとることができます。私たちは、選択肢の豊かな世界の実現を目指して、社会の近代化を推し進めてきました。しかし人間は、選択肢が多ければ多いほど、なかなか決定を下すことが難しくなるようです。選択肢に順位が付けられていれば、まだしもそれに依拠して判断することもできるでしょうが、まったくフラットに並べられていると、さてどれを選んだらよいものか、さっぱり見当をつけにくくなるのです。

選択にこのような迷いが生じた場合、多くの人はどうするでしょうか。それがジャムなら、とりあえず購入を控えておくこともできるでしょう。しかし、どれかを選択しないと前には進めない場合、どうしたらよいでしょうか。※デジタル・ネイティブの世代なら、さっそくスマホを取り出して、ネットで検索をかけるかもしれません。しかし、もつとも手っ取り早い方法は、身近にいる誰かに意見を尋ねてみることでしよう。

ネットの検索機能も、じつは多数の人間の態度を※統計的なアルゴリズムで割り出しているにすぎません。たとえば、ネットの通販サイトで推薦商品を表示してくれる機能は、自分が購入した商品と同じものを購入した他の人の多くが、それ以外に

どんな商品を購入しているかを計算して示してくれるものです。私たちは、様々な局面において、他者の態度や意見を参考にしながら自らの選択を行なっているのです。そして、近年はさらにその傾向が強まっています。

AKBにいた前田敦子さんは、第三回の総選挙でトップに選ばれたとき、こう語っています。「プロデューサーにセンターで歌えと言われても、どうして自分なんだろうと不安があった。でもファンに選んでもらって、ここに居ていいんだと思えました」(『朝日新聞』二〇一二年一月一日)。アイドルとしての自分を自己評価するに当たって、秋元さんによる評価だけでは自信を抱くことができず、ファンから評価されて初めて安心できたと言っているのです。

AKBを国民的なアイドルグループへと育て上げた秋元さんは、そのメンバーにとって神様のような存在です。しかし、その彼から授かった評価であっても、自信の絶対的な根拠にはなりえず、不安を覚えてしまう。彼女はそう※吐露しているのです。では、③この状況を学校に置き換えてみたらどうでしょうか。AKBのメンバーは秋元さんをしれば先生と呼んでいるようです。③この状況を学校に置き換えてみたらどうでしょうか。AKBのメンバーは秋元さんをしれば先生と呼んでいるようです。すると、学校の教師から受ける肯定的な評価が、今日の子どもたちにとっては絶対的な自信の根拠となりえなくなっていることに気づかれます。裏を返せば、その否定的な評価も、絶対的な反発の対象とはなりえなくなっているのです。教師は教育のプロフェッショナルのはずですが、その言動の重みが大幅に失われているからです。先生の教えを信じてさえいれば人生の可能性が開けるなどとは、もはや素朴には思えなくなりました。そこに自分の人生の指針があるとは感じられず、その代わりに、ちやうど前田さんがファンからの評価を自信の支えとしたように、クラスメートからの評価のほうに圧倒的な重さを持つようになっていくのです。

たとえば、フェイスブックなどの※SNSを駆使して絶えずつながりを保持しようしたり、ツイッターで※フォロワーの数を過剰に気にかけたりするのも、おそらく同様の理由からでしょう。そこでもらえる「いいね!」の反応が、自分の支えとなっているのです。他者に囲まれた価値ある人間として自分が見られているかどうか、周囲の人びとの反応を過剰に気にするのは、そもそも承認を与えてくれる他者がいるかどうか、自分自身がつねに気を揉んでいるからです。だから、④二重の意

味で他者からの評価が気になるのです。

…〈中略〉…

子どもたちの人間関係が流動化したのは、私たちの価値観が多様化し、既存の制度的な枠組みに強く縛られなくなったことの帰結^{きけつ}でした。かつて様々な規制に効力があつたのは、その※執行主体に権威^{けんい}があつたからですが、価値観の多様化は、その特権性を削^そいでフラットな関係にするため、規制の正当性が崩^{くず}れていくのです。いずれにしても、現在の日本では、かつてより多様な生き方が積極的に認められるようになり、人生の選択肢も広がってきました。しかし、それは同時に、かつてのように⑤安定した人生の羅針盤^{らしんばん}が見つかりにくくなったことも意味しています。

⑥明確な評価の物差しが社会の側に存在していた時代は、従順な模範生^{もはんせい}のように自分の内面にそれを取り込んで自己評価の拠^より所とするにせよ、あるいは場合によっては不良少年のように反発を示して攻撃の矛先^{こうげき}を向けるにせよ、どちらにしてもそれを標準器として利用することで、自己確認の基盤を確保することが容易でした。また、たとえ自分の信念や信条だけに従って生きているつもりの人であつても、その根拠は自身のたんなる思い込みにあつたわけではなく、社会的な物差しと付きあわされることで客観性が※担保^{たんぽ}されていきました。だからこそ、それは時々^{ときどき}の気分^{きぶん}に左右されることなく、つねに一定の方向を指し示す人生の羅針盤となりえたのです。

このように、安定した人生の羅針盤が社会の側に存在し、それを個人が内面化していた時代には、人びとはそれを判断の拠り所^{きょしよ}にすることで、たとえ所属する集団に強く縛られていたとしても、その評価を過剰に気にしなくても済^すんでいました。自分の信念や信条を持っていた人も同様です。自分が進んでいる方向には普遍的な正し^{ただし}さがあると思えたので、たとえ今は周囲の人たちに理解されなくても、いずれは分かつてもらえるだろうと素朴に期待をかけられたのです。

ところが、今日のように価値観が多様化してくると、自分がどんな選択肢を選んだとしても、それを選んだことに安定した根拠を見出せなくなつてしまいます。様々な選択肢が横並びになると、別の選択肢の魅力^{みりょく}がいつまでも意識のなかに残り、いま自分が選んだものが絶対とは思えなくなるのです。せっかく選んだものに何か少しでも不都合^{ふつごう}な点が見つかる^みと、すぐに別

の選択肢へと目移りが始まつてしまうからです。このとき人は、周囲の他者からの評価にすがること、自らの選択の安定性と客観性を確保しようとし^たます。⑦自らの判断が妥当^{たとう}であつたことの根拠を、そこに求めざるをえなくなるのです。

今日の子どもたちは、学校とは異なつた価値観が社会にはいくらでも存在することを、すでに幼少の時期からよく知っています。彼らの眼差^{まなざ}しは、きわめて多種多様になりました。だから、つねに場の空気を読んで周囲の評価を確認しなければ、いま自分が向かつている方向は本当にこれでよいのか、その確証を得ることが難しくなつてい^るのです。自分が進むべき方向についての迷いを※払拭^{ふっしょく}するため、周囲からの反応を絶えず探り、それを自分の羅針盤とせざるをえません。その結果、他者から与えられる自己承認の比重が増し、それを得られるかどうかが不安の源泉^{げんせん}となつてきます。他者とながつていられない人間には価値がないかのような感覚が広まつてきた背景には、このような承認願望の強まりという事情もあるのです。

※デジタル・ネイティブの世代：子どものころからパソコン・インターネット・携帯電話を使いこなす若い世代。

※統計的なアルゴリズム：多くのデータを分析する方法。

※吐露^{とろ}している：心の中の思いをかくさず述べている。

※SNS：「ソーシャルネットワークキングサービス」の略。インターネットを通じてたくさんの人に情報交換の場を提供するサービス。本文中の「フェイスブック」や「ツイッター」もこれにあたる。

※フォローワー：「ツイッター」に書き込んだ自分の情報を、読んでくれる人のこと。

※執行主体：さまざまな規制を実行する人や組織。

※担保されてい^ました：保証されてい^ました。

※払拭する：すっかり取り除く。

問 1

——線①「社会心理学者のシーナ・アイエンガーが行なった興味深い実験があります」とあるが、この実験からどのようなことが分かると筆者は考えているのか。その説明として最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア たくさんの選択肢があるのは良いことのようにだが、選択肢の評価に差がない時は、どれを選んだら良いのか分からなくなるということ。

イ 選択肢はあればあるほど便利そうだが、何を買うのか前もって決めていない時は、どれを買うのが一番良いのか決められなくなるということ。

ウ なるべく多くの中から選べれば楽しい買い物ができそうだが、目立つ選択肢がない時は、買い物の楽しさが感じられなくなるということ。

エ 選択肢は多ければ多いほど良さそうだが、自分のお気に入りがいない場合は、商品の一つ一つ根気よく見比べていくことができなくなるということ。

オ 人々は選択肢が豊富な世界を目指してきたが、選択肢がたくさんあつて迷う場合は、自分では決められずにネット検索をすぐにかけるということ。

問 2

② にあてはまる言葉として最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 発展 イ 原因 ウ 皮肉 エ 消滅 オ 未来

問 3

——線③「この状況を学校に置き換えてみたらどうか」とあるが、「この状況」と「学校」には、どのような共通点があると筆者は考えているのか。その説明として最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア どちらの場合も、目上の人物が自分を高く評価してくれた時はそれだけで安心してしまいが、低く評価された時はそれを無視してしまうという点。

イ どちらの場合も、目上の人物への信頼が大幅に失われたため、その人物からの評価ではなく、周囲から与えられる評価の方を気にしてしまうという点。

ウ どちらの場合も、目上の人物からの否定的な評価よりも、自分のまわりにいる人々からの好意的な評価の方を信頼してしまうという点。

エ どちらの場合も、自分のどんどころが高く評価されたり批判されたりしているかについて、評価された人自身が深く考えていないという点。

オ どちらの場合も、自分に対して目上の人物から与えられる評価よりも、自分のまわりにいる人々から与えられる評価の方を信用してしまうという点。

問4 — 線④「二重の意味で他者からの評価が気になるのです」とあるが、ここで「子どもたち」が気にしているのはどのようなことか。本文中の言葉を使って70字以内で説明しなさい。

問5 — 線⑤「安定した人生の羅針盤が見つかりにくくなった」とあるが、その原因となっているのはどのようなことか。本文中から7字で抜き出して答えなさい。

問6 — 線⑥「明確な評価の物差しが社会の側に存在していた時代」とあるが、この「物差し」は、当時の人々にどのような良い影響を与えたのか。その説明として不適切なものを次の中から1つ選び、記号で答えなさい。

- ア この「物差し」のおかげで当時の人々はまわりの人々の評価をあまり気にする必要がなかったということ。
- イ この「物差し」のおかげで当時の人々は自分の考えの正しさを確かめることができたということ。
- ウ この「物差し」のおかげで当時の人々は誰に対しても思いやりを持つことができたということ。
- エ この「物差し」のおかげで当時の人々は自分の考えや選択に自信を持つことができたということ。
- オ この「物差し」のおかげで当時の人々は自分がどんな人間なのか確認しやすかったということ。

問7 — 線⑦「自らの判断が妥当であったことの根拠を、そこに求めざるをえなくなるのです」とあるが、それはどういうことか。その説明として最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

- ア 良い選択肢が一つもないことが原因で何を選んでも目移りするため、判断の正しさの根拠を、まわりの人が自分と同じ判断をしているかということに求めていくしかないということ。
- イ 選択肢を見比べる基準がたくさんあることが原因で何を選んでも目移りするため、判断の正しさの根拠を、まわりの人から自分の判断を評価してもらうことに求めていくしかないということ。
- ウ 選択肢の数が多すぎることが原因で何を選んでも目移りするため、判断の正しさの根拠を、まわりの人は何を選んでいいのかということに求めていくしかないということ。
- エ 選択肢が比べにくいことが原因で何を選んでも目移りするため、判断の正しさの根拠を、まわりの人からくわしく説明してもらふことに求めていくしかないということ。
- オ どの選択肢も同じように感じられることが原因で何を選んでも目移りするため、判断の正しさの根拠を、まわりの人から自分の能力を高く評価してもらうことに求めていくしかないということ。

二 次の文章は、高田郁『ムシヤシナイ』の一部である。主人公・秋元路男は大阪のとある駅の構内で駅蕎麦屋を営んでいる。これを読んで、後の問いに答えなさい。なお、出題に際して、本文には省略および表記を一部変えたところがある。

後片付けを終えて、孫と肩を並べて家路に就く。月のない夜、ネオンが明るすぎて、星の姿は全く見えなかった。飲食店が軒を連ねる繁華街は、忘年会の客で溢れ、騒々しいばかりだが、そこを抜ければ意外に閑静な通りになる。シャツの降った印刷工場の脇を通っている時、弘晃が

1 呟いた。

「ジイちゃんさあ、虚しくなんない？」

「何が？」

路男は孫の問いかけの意味を汲みかねて、首を振じって弘晃を見上げた。

祖父の視線を避けて、昏い眼差しを路上に落とし、ひと呼吸置いて弘晃はこう続けた。

「駅蕎麦を食べに来る客つてさ、別に、料理に期待してるワケでもないし……。手取り早く食欲満たしてるだけじゃん」

「ええやんか、それで」

① 路男は大らかに応え、立ち止った弘晃に構わず、先に歩を進める。

でも、と弘晃は太股で追いつくと、

「でも、やつば駅蕎麦は、ちゃんとした食堂とは違う。虚しいよ、やつば」

と、挑む口調で祖父に伝えた。

そして、祖父の返事を待たずに、足もとの空き缶を勢いよく蹴り上げた。まだ少し中身の残っていた空き缶は、四方に液体を飛ばしながら闇の奥へと消えていく。

A 火の気のないアパートの一室に戻ると、路男はそのまま台所に立った。

弘晃はあれからずっと、

2 黙り込んでいる。電気コタツのスイッチを入れることさえ忘れている孫に、路男は、

「今、夜食つくるよつて、温うして待つとき」

と、声をかけた。

身を屈めて冷蔵庫を探ると、賞味期限が明日までの茹で蕎麦が二袋、残っていた。ネギを小口に切り、蒲鉾は大きく斜めに削ぎ切りする。

「虫養い、いう言葉が大阪にはあるんや」

出来上がった二人分の蕎麦を電気コタツの上に並べて、路男は弘晃に語りかける。

冷えた室内に、井からは

3 柔らかな湯気が立っていた。

「ムシヤシナイ？」

どんな文字をあてるのか、

B 皆目見当もつかないのだろう、外来語にしか聞こえない口調で、弘晃は繰り返すと、熱い井に手を伸ばした。ああ、と祖父は頷き、孫のために瓢箪型の七味入れを取ってやる。

「軽うに何ぞ食べて、腹の虫を宥めとく、という意味や」

「ふーん」

興味の湧かない声で応えて、弘晃は熱々の蕎麦を口に運ぶ。一口すすって気に入ったのか、ズズズッと美味しそうに食べ進めた。

目を細めてその様子を眺めていた路男だが、ゆつくりとした仕草で急須を取り上げ、茶葉にポットの熱湯を注ぐ。

「今日みたいに寒い日は、湯気がご馳走や」

湯気の立つ湯飲みを孫の手もとに置いて、祖父はさらに続けた。

「帰ればご飯が待ってる。時間さえあれば、ゆつくり食事が出来る。懐に余裕があったら、派手なご馳走も食べられる。」

でも今は、そういうわけにいかん。せやから、取り敢えず駅蕎麦で虫養いして、力を補う——そういう虫養いを、ジイちゃん

は大事に思ふんや」

話の途中から、弘晃は箸を止めて、じっと祖父の※双眸を見つめていた。聞き終えて、何か言いたげに弘晃は唇を開きかけ、しかし、またきゅつと一文字に結び直した。

路男は、手もとの湯飲みを手にとって、温もりを確かめるように掌で包むと、こう言い添えた。

「それになあ、お前の言う『ちゃんとした食堂』ばかりなら、世の中、窮屈で味気ないと思うで」

祖父のその台詞に、孫は

4

両の瞳を見開く。

トウルルル

トウルルル

秋元家の電話が鳴ったのは、丁度その時だった。咄嗟に弘晃がぎくりと身を固くする。勧誘か間違いか、あるいは悪戯でしか鳴ることのない電話だったが、その受話器に、路男は躊躇いなく手をかけた。

「はい、秋元です」

名乗ったあと、受話器の向こうの声を聴いて、路男は唇を僅かに歪めた。思った通り、電話の主は東京の正雄だったのだ。弘晃が家を出て二日、正雄は漸く、息子の立ち寄り先として大阪の路男のことを思い出したのだろう。

無沙汰を詫びるでもなく、老父の暮らしぶりを尋ねるでもなく、単刀直入に弘晃の消息を問う正雄に、路男は

C

表

情のまま答える。

「ああ、弘晃なら来てるで。暫くうちで預かるさかい。……えっ？ 何やて？」

視野の隅に、C 固唾を呑んで様子を窺う弘晃が映っている。路男は身体ごと電話に向き直り、声を低めた。

『勉強が遅れる』て……お前、それ本気で言うてんのか」

※恵子が生きていれば、上手にとりなしたかも知れない。だが、路男は良い齢をした息子のあまりの愚かさ、このド阿呆！と受話器に向かって罵声を浴びせていた。

「おんどれは父親のクセしてから、子供を潰す気か。いつペン目え覚まさんかい！」

がしやん、と怒りに任せて受話器を叩きつけたものの、②煮えたぎった憤怒はそう簡単には路男から去らなかった。

音のない一室に、古い掛け時計の秒針だけが妙に大きく響いている。

振り返り、孫の様子はと見れば、弘晃は卓上に置いた握り拳を

5

震わせていた。必死で感情の爆発に耐えている

その姿を目にして、路男は黙り込んだ。

どれほどそうしていただろうか、弘晃が、オレ、と掠れた声を絞り出した。

「オレ、親父を殺すかも知れない」

部屋の空気が一瞬、薄くなった。

弘晃が苦悩の果てにその台詞を口にしたことが容易に察せられて、路男は敢えて無言のまま、真剣な眼差しを孫へと向けた。

弘晃は右の拳で唇を覆い、くぐもった揺れる声で打ち明ける。

「目の前に包丁があると、親父を刺しそうな気がして息が出来ない。いつか自分で自分をコントロール出来なくなる。そうしたら……」

弘晃の肩が、上腕が、小刻みに震えだした。双眸に激しい怯えが宿り、うつすらと涙が幕を張っている。

「そしたら、オレ……親父を……」

「弘晃」

見かねて路男は孫の名を呼び、その背中に手を置いた。

※刹那、下瞼で辛うじて止まっていた涙が、色の失せた頬へと滑り落ちる。

「ジイちゃん、オレ……自分が怖い」

恐くて堪らない、と言葉にすると、弘晃は両の掌を開いて顔を覆った。

③怯えの根源を口にしたことで、弘晃を支えていた何かが崩れたのだろう。十五歳の少年は、電気コタツの天板に突っ伏して

※慟哭した。

：（中略）：

営業中は圧倒的な存在感を誇っていた駄蕎麦屋も、商いを終え、照明も落ちてしまえば影が薄い。ほんの数時間前にかけた鍵を外し、明かりをつけると、路男は弘晃を※厨房に招き入れた。

落ち着かない様子で店内を見回す孫には構わず、ネギの根を落とし、流しで洗って俎板に束ねて置き、包丁を添えた。

「さて、と。弘晃、こつちおいで」

声をかけられて、祖父の方へ向き直った弘晃だが、俎板に置かれた包丁を認めると、ぎよつとして両の肩を引いた。

「ジイちゃん、オレ、包丁は……」

両腕を後ろに回して身を強張らせる弘晃に、路男は緩やかに頷いてみせる。

「大丈夫、ジイちゃんが手え添えたるよつて」

祖父に言われて、孫は俎板の前に立つと、恐る恐る包丁の柄を握った。朴の木を用いた白い柄を、しかし、弘晃は掌に包むだけで精一杯の様子だった。

「もつとしつかり握らなあかん、かえつて危ないで」

こうするんや、と路男は孫の手に自分の手を添え、がちがちに固まった指を解して、正しく持たせた。

「せや、『小峯にぎり』いうてな、この持ち方を覚えたら、これから先、色々と役に立つ」

そうして、ネギに刃をあてがうと、

「よつしや、ほんならネギ切ってみよか」

と命じ、手を添えたまま刻み始めた。

切りたくない、との思いが弘晃の腕を重くする。難儀しながらも、路男は弘晃を導き、さくつさくつとネギに刃を入れていく。

「口に障らん厚み……これくらいの小口切りにな。ほな、自分で切ってみ」

見本を示すと、祖父は孫の右手を解放した。

必死の形相で、弘晃は包丁を握り締めて、ネギを刻む。ざく、ざく、ときこちない包丁遣いは、しかし、暫くすると、さく、さく、と徐々に柔らかな音へと変化していった。それにつれて、弘晃の身体の強張りは取れ、表情も少しずつ穏やかになっていく。

「いくつもの塾をかけ持ちして、実力以上の中学に受かった。けど、入ってみたら秀才がゴロゴロ。授業についていくのがやっとだった」

路男はただ無言で、孫の打ち明け話に耳を傾ける。

「親父には努力が足りない、と殴られてばかり。でも、足りないのは努力じゃなくて、能力だったんだ。三年通ってそれが身に沁みた」

自身に言い聞かせるような口調だった。

④ たかだか十五歳で、自身の人生を諦めた様子の弘晃の姿が、路男には胸に伝わる。それに耐えて、祖父は孫の包丁遣いを見守った。

さくつさくつ、という包丁の音は、何時しか、とんとんとん、と軽やかな音色へと育っていた。俎板の上で包丁がリズムカ
ルに踊り、正確な厚みでネギが刻まれていく。用意したネギの束もそろそろ尽きようとしていた。

「仰山できたなあ、おおきに、弘晃」

業務用の箸に山盛りになった刻みネギを示して、路男は弘晃に笑みを向けた。

「上手いこと使えるようになったな。——もう大丈夫や」

孫に手を差し伸べ、弘晃の右手を包丁ごと、自身の両の掌で包み込む。包丁の刃先が路男の腹を向いているのを知り、弘晃は怯えた目で祖父を見た。

「弘晃、お前はもう大丈夫やで」

逃れようとする孫の手をしつかりと握ったまま、路男はぎゅつと目を細めてこう続けた。

「包丁は、ひと刺すもんと違う。ネギ切るもんや。この手えが、弘晃の手えが覚えよった」

「あ……」

弘晃の瞳に涙が浮き、瞬^{またた}く間に溢れだす。堪えようとして堪えきれず、戦慄^{わなな}く唇^{くちべ}から嗚咽^{おえつ}が洩れ始めた。心配要らん。

弘晃、もう何も心配要らんで。

号泣^{ごうきゅう}する孫の背中を撫^なでながら、祖父は幾度^{いくど}もそう胸のうちに繰り返した。

※双眸^{そうまう}…左右両方の瞳。

※恵子^{けいこ}…路男の亡^なくなった妻。

※刹那^{せつな}…あつという間に。

※慟哭^{どうこく}…激しく泣くこと。

※厨房^{くわふ}…台所。

問 1

1

5

にあてはまる言葉として最も適当なものを次の中から選び、それぞれ記号で答えなさい。ただし記号はそれぞれ一度しか使えないものとする。

- | | | | |
|---------|---------|---------|---------|
| ア わなわなと | イ はきはきと | ウ むつつりと | エ ほかほかと |
| オ はつと | カ ぼそりと | キ さつと | ク どうどうと |

問 2

線 a「の」・ b「られる」と同じ意味・働きのものとして最も適当なものを次の中から選び、それぞれ記号で答えなさい。

a「の」

- | | |
|----------------|-------------------|
| ア 私の兄は文学部の学生だ。 | イ 彼はいつも学校に来るのが遅い。 |
| ウ 入学式は桜の咲くころだ。 | エ 私は二つのうち安いのがいい。 |

b「られる」

- | | |
|---------------------|-------------------|
| ア 小学生にでも答えられるような問題。 | イ 先生が教室に入って来られる。 |
| ウ 農家の人によって植えられる。 | エ 人からほめられるのはうれしい。 |

問 3

線 A、C の本文中の意味として最も適当なものを次の中から選び、それぞれ記号で答えなさい。

A 「火の氣のない」

- ア 飾^{かざ}り氣がなくつまらない イ 電氣が消えて暗い
ウ 人の氣配がなく恐ろしい エ 暖かさがなくさびしい

B 「皆目見当もつかない」

- ア 一度も考えたことがない イ 全く予想ができない
ウ だれも聞いたことがない エ 全然理解ができない

C 「固唾を呑んで」

- ア どうなることかと緊張^{きんちやう}して イ どうすればいいのか迷^{まよ}って
ウ 予想外の出来事にはっとして エ 何も考えられずぼんやりして

問 4

c にあてはまる言葉として最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

- ア 熱い イ 涼^{すず}しい ウ 苦い エ 深い オ 悲しい

問 5

線①「路男は大らかに応え、立ち止った弘晃に構わず、先に歩を進める」とあるが、路男がこのような態度をとったのはなぜか。その理由として最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 豪華^{ごうか}なごちそうを出すきちんとした食堂よりも、格安で美味しいものを提供する自分の駅蕎麦屋のほうが立派^{りっぱ}だと考えており、孫の言葉を少しも氣にかけていないから。

イ 孫が言うような立派な食堂とは違うが、駅蕎麦屋の仕事に自分なりに誇りを持って取り組んでおり、その仕事を馬鹿^{ばか}にされたように感じて傷ついてしまったから。

ウ たとえ手軽な蕎麦を出す駅蕎麦屋であっても、客は出される料理に期待しているということを知らずに、自分の仕事を馬鹿にするような孫の態度に腹を立てているから。

エ 世の中にはちゃんとした食堂だけでなく、駅蕎麦屋のような気軽な食堂も必要であるが、孫にはその仕事の大切さがこの先も理解できるはずはないと諦めているから。

オ ただ食欲を満たすためだけの手軽な駅蕎麦屋であっても、人が力を補うには大切なものだと思信を持っており、否定的な孫の言葉が氣にならなかったから。

問6 — 線②「煮えたぎった憤怒」とあるが、正雄の弘晃に対するどのような点に路男は腹を立てているのか。本文中の言葉を使い80字以内で説明しなさい。

問7 — 線③「怯えの根源」とあるが、それは弘晃にとってどのようなことか。その説明として最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

- ア 学校の成績が思うように伸びないと、父親に努力が足りないと言われ殴られてしまうこと。
- イ 家出するほど追いつめられてしまった自分の気持ちを、父親にさえ理解してもらえないこと。
- ウ 自分に対して常に厳しい態度で接する父親に、今回の家出のせいでまた叱^{しか}られてしまうこと。
- エ 成績の悪い自分に暴力をふるう父親を、いつか殺してしまうのではないかということ。
- オ 自分なりに努力を続けているのに、いつまでもたっても父親の期待に応えられないこと。

問8 — 線④「たかだか十五歳で、自身の人生を諦めた様子の弘晃の姿が、路男には胸に応える」とあるが、ここでの路男の気持ちはどのようなものか。その説明として最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

- ア もう十分にものごとの善悪がわかる年頃なのに、父親の言うことに意味もなく反抗^{はんこう}し続け、努力をせず投げやりな人生を送っている孫の様子にあきれる気持ち。
- イ 中学生になったのに、父親からの助言すら理解できず、自分には能力がないから駄目^{だめ}だと不満ばかりこぼしている孫の様子にがっかりする気持ち。
- ウ まだ今後の可能性はたくさんあるのに、能力がないからいくら努力をしても無駄^{むだ}なのだと、自分で自分の限界を決めてしまっている孫の様子を切なく思う気持ち。
- エ あまり人生経験も豊かでないのに、父親に言われた通り自分は努力や能力が足りないのだと、自分自身を責めてばかりいる孫の様子を気の毒に思う気持ち。
- オ 小学生の時は勉強ができたのに、中学校の授業には全くついていくことができずいつも逃^にげているばかりで、言いわけを繰り返す孫の様子を情けなく思う気持ち。

三 次の各文の——線部のカタカナを漢字に直し、漢字には読みがなを付けなさい。

- ① 兄のチュウコクに従う。
- ② 辞書をいつもザユウに置く。
- ③ 年末年始はキヨウリに帰る。
- ④ ハチクの勢いで勝ち上がる。
- ⑤ 発想がヒンコンだ。
- ⑥ 王としてクンリンする。
- ⑦ 親や先生を敬う。
- ⑧ 上背がある彼はバレーボールの選手になった。

問題は、これで終わりです。

受験番号

氏名（

）

「解答らん」

注意 上の＊のらんには、何も書かないこと。

＊

＊		
＊	＊	＊

＊				
＊	＊	＊	＊	＊

＊

問7	問6	問5	問4			問3	問2	問1
								1
						A	a	2
						B	b	3
						C		4
								5

問8	問7	問6				問5	問4	問3	問2	問1
								A	a	1
								B	b	2
								C		3
										4
										5

⑤	①			
⑥	②			
⑦	③			
⑧	④			

三

二

一